

## <金融史パネル>

### 都市における中小企業金融・小口金融とその担い手 —戦前のお阪・尼崎・東京—

#### 趣旨

佐藤政則（麗澤大学）

1960年代後半から本格化した戦前期に関する日本金融史研究は、今日では膨大な個別事例研究と有力な金融構造論を共有するに至っている。しかしながら研究成果の全体的配置を觀れば、企業金融を担う銀行部門における制度・政策、環境、経営の研究が中心である。当然ながら、そこから漏れる分野も多く、大都市における中小企業金融や家計向けの小口金融などは極めて手薄な分野の一つである。もちろん手薄であることについては、積極的な理由も理論的な問題もあるのだが、とにもかくにも実態があやふやなままでは、議論のやり様がない。

したがって実態の究明を目的に本パネルでは、まず大都市の中小企業金融がどのような主体に担われていたのか、そもそも論から始めたい。具体的には大阪を取りあげ、貯蓄銀行、無尽会社、信用組合とともに普通銀行（都市銀行）はどのような役割を担ったのかを検討する。次に急テンポで工業化・市街地化が進む尼崎において、なぜ市街地信用組合（現在の信用金庫）が必要となっていくのかに焦点を絞り、普通銀行支店や系列銀行では充足されない金融ニーズとはどういうものかを考察したい。そして東京を対象に家計に対する金融を取りあげる。都市家計における小口金融の担い手としては質屋や無尽が想定されているが、その実態はほとんど不明である。

以上を通じて、これまで未解明であった領域に光があたり、銀行中心の金融史において小規模金融を正當に位置付ける試論に近づけば、非常に有意義と考える。